

旅の最終日、前日僅か数時間しか寝なかったのにも関わらず、意外なほど寝覚めが良かった。

朝気持ちよくシャワーを浴び朝食を済ませた後、最終日の活動が始まった。最終日は私たちが宿泊したホテルニューオータニの見学と歓送会といった簡単なスケジュールであった。ホテルニューオータニでの数日間の滞在における感想は高級感という言葉に尽きる。だが、3つのレストラン、2つのビルそして多くの商店を抱えるホテルがこれまで環境保護、リサイクル、クリーンな生産に尽力していたのである。環境保護やリサイクルを非常に重視している国である日本はこうした面において大多数の国や地域よりも進んでいるが、ホテルニューオータニはより優れた取り組みをしていた。非常に大規模で大量の浄化処理そしてリサイクルの設備により、ホテルニューオータニは単体のホテルでありながらも「自給自足」を実現していたが、中国企業はこれらを実現できるのだろうかと思った。

最後に歓送会の時を迎えた。「逢うは別れの始め」という道理は分かっていたが、実際にお別れをする時になるとやはり複雑な気持ちになった。歓送会では各学校の代表者からこの8日間の感想についての発表があり、それらを聴きながら、彼らの気持ちに私自身強く共感した。今回知り合った団員と常に一緒に行動して生まれた感情、ホストファミリーとの約2日間での感動等は私が日本を訪れる前には想像すらしていなかったもので、ましてやこの数日間で自分の人生や進路について考えさせられたことは言うまでもない。

「出会いとは時間がくれたものなのであれば、お別れの際も笑顔で思い出を胸にしまふ。命は無限に小さくまた大きくもあり、見つけるため又はお別れのために一生を費やしたとしても、それは他人を十分感動させるものである。」

日 付：12月3日（火）【8日目】

大学名： 外交学院

氏 名： 余嘉誠

時が経つのはとても早いもので、あっという間に今回の日本訪問も終わろうとしている。今日は私たちが3日間宿泊したホテルニューオータニの見学をしたが、このホテルのごみ処理、汚水の循環利用、自家発電そして発電時の熱を利用した水の加熱等には持続可能な発展の理念が込められていた。また同ホテルの日本庭園の美しい環境は私たちの心を癒すものであった。経済が発展する中で、持続可能な発展の理念の根強さこそが生態環境維持におけるベースである。

歓送会ではホストファミリーの皆さんと再会できとても嬉しかった。だが、この再会もこの後のお別れが原因であった。

「親愛なる旅人よ、この旅は短くも長くもあるが、最終的には素晴らしい風景になる」との団歌を歌い終わると、ステージ下の日本の皆さんは涙していた。この涙には名残惜しさや未練といった感情が含まれ、各人にとっての日中友好が凝縮されていると私は感じた。

空港でのお別れの際、中島さんも涙していた。今回の日本訪問の意義に関して私個人としては当初の願いを超えるものであった。私たちは日本企業の文化や精神を学び、日本文化を体験し、紅葉による美景を観賞し、日本を知りそして団員とも親しくなった。今回の8日間の活動はきっと私にとって最も素晴らしい思い出の一つとなるだろう。それに対する私からのお返しは、将来的に日中友好事業に携わるとともに、今回の収穫や感想といったものを身近な人に伝えることである。

最後に、中国日本友好協会、中国日本商会、日中経済協会、中島さんそして私たちの今回の活動に携わったすべての人に改めて感謝を述べるとともに、皆さんとの再会を楽しみにしている。

学生たちの観た日本

大学名： 北京大学

氏 名： 姜姍汝

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

8日間の交流が終わり、日本人の他人への思いやり、そしてヒューマンケアが印象深かった。

私のホストファミリーである長尾さん夫婦は私を迎えるために沢山の準備をし、私が日本を訪れる前からメールや電話でのやり取りをしていた。長尾さんは家族の紹介をしてくれた他、私のしたい事を尋ね、東京の天気等について知らせてくれるなど、その細やかさは本当の家族に対するものようであった。そして実際に会った際、長尾さんは今回都内で巡るルート、都内の電車路線図、衛星図、さらには日中の各時代の対照年表等を準備していた。また長尾さんは私が日本の文化について知りたいとこのことを把握していたので、神保町の様々な書店そして東京国立博物館に連れて行ってくれた他、さらに道中では詳しい解説までしてくれた。長尾さんのサポートにより私は沢山の収穫を得ることができた。そして夜の長尾さん宅では、奥さんがエアコンやバスタブ等の使い方を丁寧に教えてくれた他、歯ブラシやパジャマなどの必需品を揃えてくれていた。それはまるで実の娘に対するものようで、私は彼らの思いやりにとっても感動した。

その他、生活のあらゆる面において日本のヒューマンケアが感じられた。ホストファミリー宅の照明のリモコンは暗闇の中では「点灯のボタン」だけが光り、たとえ視力のよくない高齢者でも簡単に使うことができる。さらに浴室内のシャワーヘッドを置く棚は一つ所に固定されてなく、長さの調節ができることで身長の高さを問わず使うことができる。日本のインフラの身体の不自由な人や外国人への配慮の度合については言うまでもなく優れている。少数の人への配慮というものからは最終的に国や社会の先進性を見て取ることができる。

生活において人は様々な困難に向き合うが、日本人のマナーや思いやりそして日本の様々なヒューマンケアに満ちたデザインは、そうした人々に癒しをもたらすものであり、これこそが国や民族の人間味だと思う。

大学名： 北京大学

氏 名： 張力丹

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

「多くの書物を読むよりは多くの地を巡り歩いた方が良い」との中国のことわざにあるように、今回の日本での活動において私たちは様々な土地を巡り多くの収穫を得ることができた。その中でも印象深かったものが二つある。

一つめは日本人の各種製品のデザインにおける「人間本位」の理念である。デザイナーは使用する人のあらゆる需要を踏まえ、人を根幹に据えデザインをしている。例えば、空港で荷物の預け入れをする際に気付いたのだが、中国の空港の搬送用ベルトコンベアとは違い、日本の空港の搬送用ベルトコンベアの高さは地面からより近いため、乗客は重いスーツケースを持ち上げることなく直接ベルトコンベアに乗せることができた。こうしたデザインには高度な技術が必要というわけではないが、確実に乗客の利便性を高めるものであった。中国の多くの企業が技術の先進性や超越を追い求める頃、日本の企業はデザインのプロセスにおける技術と人の相互作用を重視し、技術と人の需要の融合により応用価値を最大限に高めている。この点については、中国はまだ多くを日本から学ぶ必要がある。

二つめは、製品のデザインにストーリー性があり、自国の文化をPRしている点である。ニューメディアや各 SNS サイト以外に、製品のデザインもまたストーリーを伝える一つの方法であり、日本の企業はこの点において非常に優れていた。パナソニックの電気製品を例にすると、同社はスピーカーを茶筒と融合させ、茶葉を入れることができるスピーカーを生み出していた。また両手で水平に持った時にだけ点灯するランプというものもあった。これらはそれぞれ日本の茶文化や心の平穏を求める禅文化を体現しており、巧みなデザインにより日本文化の特徴をPRしていた。中国は同様に長い歴史と豊富な伝統文化を持っているが、日本企業のように自らPRをするというような製品デザインについては持ち合わせていない。現在中国は製造業における構造転換と高度化の途中にあり、製品に文化的要素を含め国家ブランドを構築するというのは実現可能な一つの方向性だと思う。

今回の交流活動において私は日本が世界をリードするデザイン理念を目にすることができたが、これらを学び手本とすることは、中国の製品のさらなる発展に役立つと思う。

大学名： 北京大学

氏 名： 李書承

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

6. 今後ますます中国でニーズが高まる技術

1. 日本人は非常にマナーを重んじており、他人に対して常に礼儀正しくまたルールをしっかり守っている。

①サービス業に従事するスタッフは対応している目の前の客以外にも丁寧にあいさつをする。この点はコンビニやホテル、レストランを問わず共通しており、非常に礼儀正しい。②一般の旅客は自発的に列に並び、エレベーターに乗り込む際は「すみません」と声掛けをする。③お別れの際は相手の姿が見えなくなるまで手を振り、なるべく遠くまで見送ろうとする。④しきたりを重視し受け継いでいる。思いやりの点については、日本人は進んで他人の手助けをし、また不必要な面倒事を回避している。それと同時に過度な親切により相手を困らせることはなく、塩梅を心得ている。

2. ユーザー体験と品質管理。

日本では製造業や設計業において製品とユーザーとの関係を非常に重視しており、様々な些細な部分に工夫を凝らし、ユーザーの製品への満足度を極限まで高めていると同時に品質管理が徹底されているなど、日本人のモノづくり精神が非常によく示されている。

持続可能な発展の理念：今後の環境問題は現在よりもさらに厳しいものとなり、大国である中国もまた自身の責務を全うする必要がある。

汚染の減少、廃品のリサイクル利用等に関する高度な技術は今後中国における需要がますます高まると考えられる。こうした方面において日本のホテルや一般家庭では素晴らしい取り組みがされている。

インタラクション設計：日本の製品や生活施設はいずれも人との相互作用を重視しており、VR や AR といったインタラクション技術により自らが紹介する事物を人々により良く体験させている。

大学名： 北京大学

氏 名： 王遠非

テーマ： 1. 国民性についての理解

3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回の日本訪問において最も印象深かったのは美しい嵐山や賑やかな新宿といった場所ではなく、日本人の「他人に迷惑をかけない」という国民性であった。日本は資源が不足した人口密度が高いため、日本人は自分個人の利益のために全体の利益に影響を与えないように配慮しなければならない。よって電車の乗り降りの際は列を作り、エスカレーターでは左側に立ち、右側を急ぐ人用に空ける。また日本の狭い路地では数人が横並びになると道路を塞いでしまうため、自発的に二人一列になる。こうしたことから、ルーズな中国人は日本という土地においては比較的目立ってしまう。その他、日本のサービス業は心が温まるような対応をしていた。店員は常に笑顔で出迎え、様々な施設はいずれもヒューマンケアに満ちていた。浴室の鏡は顔の部分が曇らないように処理されていて、空港のカウンターのベルトコンベアは荷物が載せやすいように低く設計されていた。日本人のこうした自制、他人への思いやりといった国民性については、主に自然資源面の制約から来ていて、それにより彼らは外部への探求ではなく内部での自省をより重視するようになったのだと私は思う。

その他、日中交流の問題についても述べてみたい。データによると、中国人の日本人への印象は日本人の中国人への印象よりはるかに良い。その理由は二つある。一つめは海外メディアの中国に対する正確ではない報道により日本人が中国についての正確な状況を知ることができないという点、二つめは日本人の中国への興味が不足している一方、中国人は日本にとっても興味を持っているため、中国人は進んで日本を知ろうとし、自然とより好感を持つようになる。そのため、今後において日中交流を進めるためには、この二つの点から着手する必要がある。

最後に日本の技術について述べてみたい。私が思うに、日本のマイクロエレクトロニクス、自動車、新幹線等の科学技術は現在ではかつてほどの優位性を持っていない。また中国は現在の成長ペースから見て日本の科学技術を将来的な目標とする必要はない。反対に日本のデザインが中国には欠けていて、将来的に中国において大きな需要が生まれると私は見ている。ソニーの技術はファーウェイよりも優れているとは限らないが、人々はソニーの独特なデザインに魅了される。また日本の博物館での展示内容は中国よりも優れているとは限らないが、日本の展示方法がよりデザイン性に富んでいるため、魅力的になる。そのため、将来的に中国はこうした面で大きな需要や発展の余地があると思う。

大学名： 北京大学

氏名： 張一諾

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

5.アニメなどのソフトパワー

日本経済の発展度合や日本の発達度合に関しては多くの人がきっと一定の理解をしていると思う。そのため私は日本のソフトパワーについて述べてみたい。日本のソフトパワーについて私は以下二つの総括を行いたいと思う。

一つめは、日本国民は概ね素養が高く、彼らは「他人に迷惑をかけない」との原則に基づき良好な公共秩序を守っている。路地では右側を歩き、エレベーター内では騒がず、電車を待つ際はきれいに列を作る、日本人のこうした強いマナー意識が日頃の素養の高さにつながっている。これは日本の教育レベルの高さを示している。

二つめは、日本は優秀な文化の吸収や継承に長けている。日本は中国との交流が盛んで、唐や宋の時代からすでに漢字、茶道、禅道等の中国の優れた多くの文化が日本に伝えられていた。これらの文化は中国から日本に伝わったものではあるが、現在では日本において大きく発展している。日本はこうした外来の優れた文化を取り入れ、その精髓を吸収し、それらを守り数百年後の今日まで継承しており、この点が日本のソフトパワーの強さの要因の一つだと思う。これに対して私たちは、時に外来の文化をあまりにもたやすく受け入れ、それらを選別することなく、さらに自身の文化の継承や保護を疎かにしがちである。

今回の日本訪問では多くの収穫が得られ、日本についてより全体的で新たな認識を持つことができた。そして日本は単に経済大国であるだけでなく、そのソフトパワーの発展ぶりについては私たちが学ぶべきだと思った。そして私は近い将来、中国と日本がより多くの面で協力を深め、互いの交流が増し、共に学び進歩していくと信じている。

大学名：北京師範大学

氏名：肖瑾

テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

日本人の集団帰属意識に関して、日本語を学ぶ私はかつて先生から、日本文化においては「他人」と「自分」を明確に区別していると聞いたことがある。これは自分と他人及び自分が所属する側と他人が所属する側を明確にするものであり、この点からは日本人の個人的意識はとても強いがそれと同時に自分の所属する集団全体も重視していると言える。そしてこうした矛盾性は日本文化の中に示されており、今回の日本訪問においては私自身も感じる事ができた。

まず京都大学において、教師からの紹介であれ学生との交流であれ、彼らは皆「愛国主義」に対する反対姿勢を示していた。この話題については踏み込んだ交流はしなかったものの、全体的に言って彼らは国家的な視点で考えるよりも、個人的視点から個人の権利や利益を守り、個人として独立した思考をすることをより重視していた。この点については、京都大学自身が研究者の集まる場所であり、国よりも自身の研究を重視するために個人の自由を追い求めるのも不思議ではないと感じた。

この他、ソニーの見学では製品の展示であれ企業文化の展示であれ、いずれも「私たち」との強い概念を打ち出していた。「『私たち』は世界に楽しさを届ける」、「『私たち』は科学技術とイノベーションで生活をより豊かにする」、これらは企業を一つの集団にまとめると共に非常に強い帰属意識を生み出すものであり、こうした企業文化は京都大学が示していた個人性とは逆の強い集団性の意識である。

ではなぜこうした違いが生まれるのか？私はその答えを考えたが見つけられなかった。そのため個人の違いと集団の性質の違いに原因を求めざるを得なかった。学術研究の面においては往々にして個人の独立した思考が強調され、企業の運営においてはチームワークが求められる。またこうした違いは日本民族が人の効率を最大限発揮させる上での一つの現象でしかなく、最終的には日本民族が労働力や人材が如何にして役割を最大限発揮できるかを突き詰めた結果だと思われる。

大学名：北京師範大学

氏名：郭蓓蓓

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

マナーや思いやりは私が日本を訪れた瞬間から常に感じられたものであった。日本人は幼い頃から「他人に迷惑をかけない」という教育を受けていることはかねてより耳にしていたが、今回の日本訪問ではその点を目にすることができ、日本人のマナーは過度に親切にすることなくまた冷たい態度をとるわけでもないといった他人との適切な距離を保つという部分に示されていた。私は日本での生活においては他者と衝突することは極めて稀だと思う。なぜなら一人ひとりが他者の利便性を考えて生活しているからで、それは双方が互いに自分の快適な空間を侵さないというウインウインの状態をもたらすからである。

こうした認識は、街中での実体験の他、ホストファミリーとの生活を通じて得られたものである。私のホストファミリーには9歳の女の子がいたが、一般的にこの年頃の子どもは最もやんちゃで、ひいては「嫌われる」場合もあるが、彼女は常に私という「ゲスト」のために自分の欲求を抑えていた。彼女のその利口さに私は自分が恥ずかしくなった。家の中では、この9歳の女の子であれ2歳の男の子であれ、両親のサポートを受けた後は必ず感謝の言葉を口にしていった（逆の場合も同様であった）。他者の邪魔をした場合は謝り、サポートを求める際は必ず敬語を使う等、心からのマナーとは何なのか私は今回本当の意味で知ることができた。

日中間の交流は大きな課題であり、今回の日本訪問で感じられた部分のみについて述べると、日本の大学生やホストファミリーとの交流の際、互いが相手について多くの誤解をしていて、理解が不十分だと感じられた。小さなものでは「中国人は皆卓球が得意だと日本人は思っている」というものから、大きなものでは政治・外交問題など、多かれ少なかれそうした誤解が存在している。しかし中国大使館において「こうした問題の解決または部分的印象の変化については一朝一夕にできることではなく、ましてや一時の言葉で解決できるものでもなく、行動により証明そして変えていくものである」との聶参事官の発言にあった通り、今回の日本訪問は日中交流を前進させるその第一歩だと私は思った。

大学名： 北京師範大学

氏名： 張琬怡

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

ホストファミリーと過ごした二日間は日本人のマナーの良さや思いやりを最も直接的に感じる事ができた期間であった。

まずは食事に関して、初日の夕食ではホストマザーは豪華な和式の食事を準備してくれて、私の目の前には大小10個近いお碗が置かれ、さらには食後のデザートまでであった。そして翌日の朝食は洋式で、とても大きなフルーツの盛り合わせもあり、フルーツの値段が高いと知っていた私はとても驚かされた。こうした点からはすでに私というゲストへのもてなしの心が感じられた。そして食事の際のお茶に関して、彼らは毎回日本茶にするか中国茶にするかを尋ねてくれた。たとえ私が「どちらでもいい」と言った後でも、「日本茶は口に合うか」、「中国の紅茶でもいいか」とさらに尋ねるなど、彼らの私への思いやりが感じられた。

次に日常生活に関して、彼らは私が聞き取りやすいように喋るスピードを抑えて、多少難しい内容については可能な限り中国語の単語に置き換えるなどしてくれたので、私たちは英語を使わなくてよい程スムーズな交流ができた。また彼らの家のスペースの問題から、彼らは今回私のために部屋を借りてくれていたが、給湯器の使い方が分からずお風呂に入られなかったと知った彼らはずっとその事を申し訳なく感じ、お姉さんもまた自分の責任だと何度も口にしていった。そしてホームステイが終わる時になっても、そのことでしっかりと私をもてなすことができなかつたと謝っていた。彼らのこうした態度から、私は彼らに申し訳なく感じさせるくらいなら最初から黙っておけばよかったと後悔してしまった。

いずれにしても、日本人の他者への思いやりや尊重というものは目に見えるものである。食事や言葉それらすべてから彼らの周到な礼儀作法が示され、彼らの思いやりは様々な部分に浸透していて、時に彼らは自分自身よりも他者を大切にしていると感じる程である。だが、こうした思いやりは魅力を秘めていて、他者からのサポートを受ける際に自然と相手側の気持ちを考えるようになる。この点は日本人の性格においてとても素晴らしい部分で、私たちが学ぶべきものだと感じた。

大学名： 北京師範大学

氏名： 張競文

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本人のマナーの良さや思いやりといった点については、日本に到着した直後から日本を離れる時まで常に驚かされるものであった。

まず日本人のマナーへの重視は生活のあらゆる面に示されていた。その中でも最も印象深かったのは、毎回大学や企業への訪問を終える際、彼らは外まで私たちを見送り、寒い風が吹く中で私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれたことである。最終日のお別れの際、ホストファミリーの皆さんは駐車場を離れ高い場所に立ってまでお別れをしてくれた。その他、エレベーター内に人がいる場合、日本人はエレベーターに乗る際に一言「すみません」と声掛けをしていた。

次に思いやりについて。これまで私は「他人に迷惑をかけない」という理念について耳にしたことはあったが、今回の日本訪問を終え、私は「思いやり」とは迷惑をかけないという点だけではなく、些細な行為又は設計により他者の生活を快適にまた便利にするという点も含まれていることが分かった。日本人は時間に正確だが、それは遅刻であれ早すぎる到着であれ、そのいずれもが他者に不便をもたらすため、取り決めの時間の2分前をベストとしている。そして遅れる場合は事前に連絡をし、早く到着した場合は外で待たなければならない。今回各企業や学校への訪問においては詳細なスケジュールが組まれ、予定の時間になった場合は解説や見学が終わっていてもすぐにそれらを終えることで活動全体のスムーズな進行を保証していた。日本社会の秩序の良さについては様々な点で感じる事ができた。

以下にいくつか例を挙げる。ビュッフェの際、皆は自発的に一つの方向に並んで食事をとっていたが、中国の学生は方向がばらばらで自分が食べたいものがある場所に直接向かうため列が乱れていた。また日本の路地は狭いため中島さんからは二人一列で歩き道を塞がないようにとの指示があった。エスカレーターでは左側に立ち、右側を急ぐ人用に空けることで人の流れが止まる事がなかった。商店のレジには「入口」、「出口」があり、入口の外で並び、前の客が離れた後にレジの担当者が次の客を呼び込んでいた。公共スペース又は公共交通機関に乗る際、皆は大声で話をする事はなかった。対して北京に戻る機内では、複数の中国人が勝手に歩き回り、靴を履いたまま横向きに寝たり、イヤホンを付けずに動画を見たりする光景を目にし、あまりの違いに私は大きな衝撃を受けた。

この他、日本では人にやさしい設計を沢山目にした。身体の不自由な人への思いやりは行き届いていて、横断歩道にすらも点字ブロックが設置されていた。地下鉄車両内にも荷物棚があり、旅行客が荷物を置けるようになっていた。お手洗いはとても清潔で、トイレは定温になっていて、さらには他人に聞かれたくない音をかき消すための機能まで付いていた。

異文化間の交流は私たちに自分たちの文化を再認識させるものである。今回の日本訪問において私は日本文化について直接的な体験と理解を得ることができた。日本人は思いやりといった面について進んだ理念や実践の成果を持っていて、私たちが学ぶべきだと思った。

大学名：北京師範大学

氏名：桂嘉雨

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

今回の日本訪問で最も印象深かったのは日本人のマナーや思いやりといった点であった。この点については、エスカレーターでは左側に立つ、電車やエレベーター内では小声で話をする、公衆トイレには常に予備用のトイレットペーパーがいくつか置かれている等日本人の生活のあらゆる面に示されていた。国民の他者への思いやりの度合というものは総合的な国力を反映する重要な指標だと私は常々思っている。なぜなら、それは短時間で完成する量的なものではな

く、長い年月をかけて積み上げられたヒューマンケアと民族的特徴だからである。かつて英国紳士が「成金」式のアメリカ人を見下していたように、現在では一部の国民の言行により、多くの先進国もまた中国の国民を「成金」式の中国人と見なしている。言い換えると、我が国は近年経済的には大きく発展したが、もし私たちが国民の素養の向上そして国際的イメージの構築や維持を疎かにすれば、私たちの経済的な発展は或いは国のイメージの構築にとってマイナスの影響をもたらすことになるかもしれない。

それと同時に、京都大学、早稲田大学そして三菱商事のスタッフやホストファミリーとの踏み込んだ交流を通じ、私は現在の中国人の日本社会への認識は前向きになっているが、その反面日本人の中国への認識は浅くまた偏ったものに止まっているとの印象が強まった。交流の後、多くの日本の方々から中国への印象が変わったとの言葉をもらったが、私が気掛かりなのは、大多数の人はこうした直接的な交流の機会を持つことがないため、長期的な誤解や凝り固まった印象により、日中両国間の目に見えない壁もまた根本的に打ち破ることができないのではないかという点である。

しかし今回の活動を通じて私は日中間の交流の先行きに自信を持てるようになった。なぜなら、民間交流がもつ活力は政治的な交流よりはるかに大きいものだからで、私たちの活力により本当の日本についてPRし、私たちを通じて本当の中国を知った日本人もまた同様にPRを行えば、日中交流ひいては日中関係の先行きはきっと明るいものになると確信している。

大学名：北京語言大学

氏名：税金妹

テーマ：1.国民性についての理解

日本という国そして日本人については、中国の近代史を多少知っている人であれば皆特殊な感情を持っていると思う。そうした感情は時代の変化と共に変わっていくかもしれないが、日本と中国は永遠に切れない関係にある。

日本語を専攻してからは意識的に日本に注目し、日本に関する書籍やニュース等を見るようになった。かつて読んだ『菊と刀』では日本人の性格について次のように記されていた：「日本人は生まれつき争いを好むが又穏やかで、好戦的だが又耽美的で、不遜でプライドが高いが又礼儀正しい。頑固だが又柔軟性に富み、従順だが他人の言いなりになることは好まない、忠節を貫くが又裏切りやすい、勇敢だが又臆病でもある。保守的だが又新たなものを好んで受け入れる。」だが、今回日本を訪れて日本社会について実際に体感した後、そうした本に記されていた内容は現代の日本人の心理とはかけ離れていると感じた。

座談会において、ある団員から自身の日本人や日本社会に対する印象についての紹介があり、彼はそれらを「静か」と「活発」という二つの言葉でまとめていたが、私もその二つの言葉がより適切だと感じた。今回の日本訪問では、日本人の様々なルールへの順守や公共スペースでの自制、他人に迷惑をかけない、また自分の愛する事業を数十年間黙々と続ける姿勢といったものを感じることができたが、「静か」な日本人は決して杓子定規ではなかった。日本の企業であれ大学であれ、いずれも自由そして開放的であり、様々な意見の存在が認められまた歓迎され、時代の流れに沿いイノベーションを行っていた。日本人もまたとても親切で、異国文化を知ることへの期待や異国文化への包容力そして情熱が感じられた。

大学名：北京語言大学

氏名：林龍玉

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

日本人のマナーはあらゆる面に示されていた。頻繁に使う「ありがとう」や「すみません」といった言葉のみならず、それ以上に行為自体から非常に高い素養が感じられた。至る所で整然と列を作っていただけでなく、買い物の際に私自身とても心地良さを感じた。店に入ると挨拶を受け、何も買わずに店を離れても感謝の言葉をかけられた。「SHIRO」で買い物をした後、店員は私が買った商品を踏まえ私が好きな香りを確認した後、香水を手提げ袋に噴きつけお辞儀をして私を見送ってくれた。こうした至れり尽くせりの接客には衝撃を受けた。

ホストファザーは中国への留学経験があり、当時ハルビンへ旅行に行った際現地はとても寒かったにもかかわらず、彼は薄いシャツ一枚であったため、目的地に近づいた頃、親切な中国人がそのままだと凍え死んでしまうと彼に伝え、綿入りの服を買ってあげたばかりか家にも泊めてくれたとのことで、ホストファザーはその時から将来的に機会があれば中国人のサポートをするに決めていて、私は彼が受け入れた8人目の中国人学生とのことであった。日中交流は一見大きな命題であるが、実際にはこうした些細なことから生まれるものであり、どちら側の人間であれ実際に相手の国を訪れてこそ真の理解が得られると思う。

近頃の大きなニュースである「高以翔の突然死事件」に関して、一部のメディアは速やかにAEDを使用せず、救助のタイミングを逸したことを原因に挙げている。そして私は今回日本を訪れて、日本においては大きな場所では各駅、小さな場所では企業内までいずれもAEDを配備していることを知った。これは医療従事者も使用する医療機器であるが、中国では配備数が少ないのと、それ以上に使用できる人も少ない現状である。日本の総務省消防庁の2018年の統計データによると、AEDの使用により患者の救命率が53.5%にまで上昇し、単に救急車を呼ぶ場合の救命率よりも6倍の高さとなっている。

大学名：北京語言大学

氏名：牙暢

テーマ：2.集団帰属意識の強さ

5.アニメなどのソフトパワー

今回の訪日活動で私は初めて日本を訪れたが、初の訪日でこれほど充実した活動に参加でき、日本について幅広い理解が得られたことをとても嬉しく思っている。旅行や留学では行く機会のない場所を沢山訪れ、また様々な日本人と交流を深めることができた。ここでは個人的に感じた部分について述べていく。

一つめは、日本人は非常に自身の伝統文化を尊重していると同時にそれら伝統文化を常に発展させているという点である。この点については日本のソフトパワーの強さの理由の一つだと思っていて、特にPanasonic Design Kyotoを訪れた際に強く感じる事ができた。私たちが目にしたのはそのほとんどが生活用品であったが、呼吸や心理状態と連動するランプ、加熱保温技術を用いた茶道具など、同社は技術により製品の機能や使用時の快適性を高めていただけでなく、そうした設計により日本の伝統文化をPRしていた。それらは一目見ただけで日本の美学を示していると分かる。パナソニックは製品の設計により、日本の伝統文化や美学の現代社会における融合と発展を促進していた。

二つめは、日本人の集団帰属意識がとても強いという点である。各企業や学校からはいずれも彼らが自分の企業や学校を心から愛していることが感じられた。企業のスタッフは自分の会社の理念を深く理解しており、自分の仕事に熱中し、自分の価値を信じ、また私たちが彼らの企業に就職するよう勧めていた。

大学名：北京語言大学

氏名：黄鑫

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

今回の訪日活動を通じて最も感動したのは日本人のフレンドリーさとやさしさであった。

私たちの乗る飛行機が出発する際、地上のスタッフはまるで友人の旅立ちを見送るかのように手を振ってお別れをしてくれた。また乗務員は乗客一人ひとりにあいさつをし、サポートを求めた際はやさしさに溢れた笑顔で最高のサービスを提供してくれた。企業訪問ではスタッフから案内や質問への回答など丁寧な対応を受けた。また私たちが見学を終えその場を離れる際は、各企業共にスタッフがゲートまで出てきて私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた。はっきり覚えているのは、三菱UFJ銀行への訪問の際、雨が降り出したため、銀行側は皆にタオルを準備していた。初め私たちはそのタオルを何に使うのか分からずにいたが、私たちが外に出て雨に濡れた時によくこのタオルは私たちが雨に濡れないように準備してくれたのだと分かった。こうした行為はもし私が接待担当者であれば思いもつかない事だったので、本当に配慮が行き届いていると思った。

その他、自由行動の際に気付いたのだが、日本人と同じエレベーターに乗る又は同じ位置に座る際、彼らは皆腰を曲げ意思表示をしていた。この点に関して私は、こうした行為は或いは日本人の信仰が基になっているのかもしれないと思った。日本人は万物には縁があると考えていて、同じエレベーターに乗ったり同じ椅子に座ったりするのも縁であり、彼らはそうした縁を大切にしているため、出会う一人ひとりに対して親切な対応をするのではないだろうか。私が買い物の際に銀座で道に迷い、その後目的地にたどり着いたがすでに店が閉まっていたため、道行く人に尋ねたところ、その人はとても丁寧にお薦めの店を教えてくださいましたばかりかその店まで私を案内してくれた。ホームステイの最後にホストファミリーとお別れをする際、ホストマザーは皆で撮った集合写真をフォトフレームに入れてプレゼントしてくれた。これにはとても感動して涙がこぼれそうになった。わずか1泊2日の付き合いだったが、彼らは私のために沢山の配慮をしてくれた。私は彼らのこうした「和やかさ」が素晴らしいと思うしまたとても好きである。

日本人の心には「他人に迷惑をかけない」というモットーがある。今回日本を訪れ私はこの点についてはっきりと感ずることができた。電車内では席を争う人はなく、皆が譲り合い、慌てて席を取りに行くことはなかった。この点について私は心地良さを感じた。日本人との交流ではまた、トイレなどのために途中で席を外す際、彼らは「ごゆっくり」と声掛けをする。これもまた他人に迷惑をかけない点の表れで、他人を急かしたり、困らせたりせずに相手の立場で考える。こうした点は日本人の最大の特徴であり、また最大の長所だと思う。

こうした様々な点から私は、日本人の素養はとても高く、礼儀やマナーが行き届いていると同時にこれは文化的な影響の結果だと感じた。日本語には大量の謙譲語や敬語が存在し、日常会話においても敬語やくだけた表現を使い分けられているが、この点が、日本人が謙虚さを常に持つ理由の一つだと思う。その他、茶道や座禅ではいずれも心の落ち着きが求められ、心の落ち着きは冷静さをもたらす、冷静さは物事への対処に非常に重要である。日本人の茶道や座禅への尊重は彼らの穏やかさや冷静さにつながっているのではないだろうか。こうした点は他者との交流において彼らが人を惹きつけるポイントであり、彼らの他者に対する穏やかで優しい姿勢は私たちが学ぶべきものだと思う。

大学名：北京語言大学

氏名：黄德尧

テーマ：4. 日中間の交流

5. アニメなどのソフトパワー

国家間の交流は外交だけに限らず、民間交流もまた極めて重要で必要不可欠なものである。今回の日本訪問において一つとても気になったことは、日本の人々は、中国人が日本について知っている程中国について知ってはおらず、彼らの中国への認識は浅くまた過去のものに止まっているという点であった。今回交流をもった日本の一流企業や学校ですらそうなのだから、一般の人々については尚のことであった。

こうした状況の大部分の原因は両国の民間交流の不足にあると考えられる。日本人は常にファイアウォールを持つ中国は外部との往来がないと考えている。確かにファイアウォールの存在はかつて私たちの交流を阻害していた部分もあるが、その他のルートは阻止されてはいない。学生である私たちはより積極的に日本の人々と交流し、ネット上や日常生活において彼らの観念を正し、その後本当の中国というものについて周囲の人へ伝えてもらうことでこそ日中両国の民間交流は継続的に発展していくと思う。

文化の発信の面で日本は常に中国の先を行っており、アニメ文化は世界中の人々から好かれている。対して中国はソフトパワーの向上や発信に力を入れているが、孔子学院といったものについてはうまく大衆に広まらず、良い効果が得られていない。将来的に中国文化の活力を刺激し、中華の文化における悠久の歴史をベースに現代的な手段で中国の物語を発信し、ひいては「マーベル・シネマティック・ユニバース」に対抗する「封神宇宙」を生み出すといったことは、日中間の交流を深めると共に中国と世界の文化的つながりを強めることにもなると思う。

大学名： 中国伝媒大学

氏 名： 任光建

テーマ： 1.国民性についての理解

私の日本への印象を単語で表すとすれば、「静か」と「活発」という一見矛盾した単語を選ぶだろう。日本人はこの意味的に矛盾した単語について程良いバランスをとっていて、それは日本の国民性における大きな特徴となっている。

ここで言う「静か」は主に心の落ち着きを指している。誠実にコツコツと努力を続けないと、遠くにある目的に到達することはできないとの言葉の通り、正にこうした心の落ち着きにより日本民族は常に世界の先頭にいる。こうした落ち着きは生活に厳かさをもたらす茶道文化になり、落ち着きの中で生活を営むと共にまた敬虔な座禅文化になり、集中する中で生活における知恵を悟る。また心の落ち着きは学者の研究事業へのひたむきさや集中力になり、企業の品質やディテールへのこだわりになっている。

「活発」は主に思想の活発さを指し、世界にユニークさと創意を提供している。ソニーの言葉を借りると、日本は創意の力で世界に感動を届けている。様々なアニメ、面白さや美学的価値に富んだ製品など、日本は思考や頭脳の活発さで自分たちの総合力を常に高めている。

動かない時は未婚の女性のように静かだが、ひとたび動くとき逃げの兔のように俊敏である。日本民族の動と静はまた日本という国の発展にも示されていて、聶佳参事官がおっしゃったように、日本は静かな湖面の下で常に動いており、バランスをとりながら一步一步着実に発展してきた。こうした発展は急激な変化というものではなく、量的変化の積み重ねで、静けさの中で質的变化を実現したのである。

日本訪問を終え、私は自分に「心が穏やかで且つ思考が活発な夢追い人となり、誠実にコツコツと努力を続け、遠くにある目的に到達する」とのモットーを定めた。

大学名： 中国伝媒大学

氏 名： 王一夏

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

マナーの良さは間違いなく日本人の大きな特徴であり、思いやりの度合は私の想像を超えていた。そのため日本に到着した当初の数時間の間私は不自由さを感じていた。

多くの人が日本のマナーを基準に中国を見て、中国が到達していない部分については素養が低いと判断しているが、それは正しくない見方である。両国の社会や民族性には大きな違いが存在している。日本のマナーの多くは確かに素晴らしいが、中国の環境には適さないもので、両国の交流のプロセスにおいては傲慢にも卑屈にもならず自分というものをしっかり持った上で対等な交流をすべきである。

それと同時にマナーは一国の国民の素養を測る上での重要な基準であることは否定できず、中国では文明都市の構築において依然としてイヤホンをつけず大音量で動画を見たり、道を塞いだりといった他者をイライラさせる現象が起きている。対して日本の地下鉄は整然とし、また多くの改札機が開いたままでも不正通過する人はみかけられず、道路では皆左側を通行する。それらの背後にあるものについては実際には容易に想像できる。それはつまり自分たちがマナーを守り、部分的な自由を犠牲にすることで公共スペースでの利便性を獲得し、それが最終的に社会全体の効率を高めることにつながっているのである。

大学名： 中国伝媒大学

氏 名： 鄭博航

テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回の日本訪問で印象深かったのは、彼らの生活におけるスマート技術とヒューマンケアであった。日本のすべてのトイレは洋式で、しかも「音姫」の機能そして温水洗浄機能が備わっていて、さらにスイッチには点字が付けられていた。私は中国そして日本でも目の不自由な人を見かけたことはないが、日本では信号灯や点字ブロックを設置した道路といった施設そして普段使う電気機器にもヒューマンケアが示されていた。トイレの機能などは高度な技術というわけではないが最も身近なものである。

その他、ホストファミリーの御宅で体験した音響設備やユニットバスといったスマート家電も印象深かった。それらは一見単純そうに見えるがそうではなく、人々の生活の質を確実に高めるもので、且つ耐久性に優れていた。中国にも似たような音響設備があるが、さほど普及しておらず、使用する割合も高くない。中国にはそうした技術はあるが、生活の質に対する私たち自身の意識が不足しているため、私たちは日常生活をより大切に、ソニーのように生活に楽しさを加え、生活の質を高めていく意識を持つ必要があると思う。

大学名： 中国伝媒大学

氏 名： 袁嘉憶

テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

日本に到着して間もない頃、体験して最初に驚かされた技術は日本のトイレであった。中国ではトイレの自動化がある程度進んでいるが、日本の全自動化レベルと比べればまだ差があった。トイレの個室に入ると便座の蓋が自動的に開き、使用を終えると自動的に洗浄と消臭を行う。また水に溶けないごみなどはセンサーで開くごみ箱に捨てることができる。手洗いの際の蛇口やハンドソープもまたセンサー式で、トイレの使用のプロセスにおいて手を使うのはドアの開け閉めと手を拭く時だけであった。日本の発達した自動化システムには驚かされると同時にとても羨ましく感じた。当時中国のおばさん達がなぜこぞって日本にウォシュレットを買いに行ったのか分かった気がした。こうした自動的で人にやさしい

設計は中国の人々もまた求めているもので、「トイレ革命」は今まさに中国で展開されている。近い将来、中国のトイレが日本人も驚くほど発達することを願っている。

もう一つ驚かされたのは、日本のホテルにおけるごみの分類と廃水のリサイクル技術であった。ホテルニューオータニではすべての生ごみが分類回収され、いくつかの工程によりそれらのごみは自然界の養分に生まれ変わっていた。また大量の廃水は沸騰、攪拌、沈殿といった工程を経て、飲用水としてホテルに供給されている。こうしたリサイクル技術は一つのホテルを永続的な利用が可能な環境に優しい「永久機関」とするものであり、ごみを出さず、廃水を飲用水に変える、これこそが実際に役立ちさらに人々の生活と密接に関わる持続可能な発展である。中国のホテルもこうした技術を身に付け、根本から食料や水資源の浪費の問題を解決できることを願っている。

かつて日本は中国を師と仰ぎ漢文化を学んだことで茶道や禅の文化が生まれたが、現在中国は日本を師と仰ぎ環境技術を学び優れた点を吸収し、より進んだ普及可能な技術を生み出すことで、科学技術のヒューマニゼーションと環境に配慮した社会またそれらの持続的な発展を実現すべきだと思う。

大学名： 中国伝媒大学

氏名： 江篠芋

テーマ： 4.日中間の交流

少子高齢化に向けた女性従業員に対する制度及び出産育児福利に関する交流

2019年6月24日、私は自分の微信公式アカウントにおいて『日中両国の恋愛・結婚観と少子化に関する分析』との文章を掲載し、日本の「大志なき時代」における少子高齢化、女性の恋愛や結婚また出産や育児に関する意識の現状について述べた。そして今回日本の各大企業や大学を訪れ交流を行った後、私はこのテーマについて新たな認識を得ることができた。（以下に3つのコメントを載せる）

・京都大学の慶太さんそして野村暁里さんは、「日本において専業主婦の割合は未だに多い」とコメント。

・三菱商事では2014年から「女性活躍」制度を実施し、女性の出産・育児及び就業を奨励するために一連の制度を設けている。その中で金属資源本部の福田圭馬氏はこうした制度は少子高齢化の解決につながる素晴らしい取り組みであるとしてこうした制度への支持を表明し、同制度の実施を担当する人事部の中西佐和子氏からは、女性、育児基金と「ダイバーシティ室」の取り組みはかつて多くの男性社員から理解が得られなかったが、近年では幅広く実施されさらにプロセスもより簡略化された。またここ5年間では三菱商事として同制度に24億円が投入されたとお話があった。

・鈴木友絵氏（ホストファミリー、JTB）は5人の子どもを持つ「共稼ぎ」だが、彼女は、現在では社会観念が次第に変わっていて6割から7割の女性が働いている。また少子化の現象は依然として存在しているが、それは観念と関係していて、川崎市には「子沢山」の伝統があるが、東京では多くの人が「一人暮らし」を選択していると認識している。

寸評：多くの中国人は日本の社会や家庭というものについて、男性が外で働き女性が家庭内を仕切るといった役割分担が依然として日本の家庭の様相だという従来からの認識を持っているが、実際には少子高齢化の緩和のために日本は多くの措置をとり、さらに女性への多大な配慮を示している。一方現在の中国では少子化はデータ的にも厳しく、女性に対しては就職における「高いハードル」や昇進における「限度」、そして出産育児における差別などが依然として存在している。日本のこうした変化には驚かされたが、これらはいずれも日本人が学ぶことに長けている、また日本人の切り替えの素早さそして政府の強い支援（経済産業省、厚生労働省、内閣府）といった点に起因している。日中の交流においては互いに経験を汲み取り学び合う事が大切である。中国が日本の経験を基に問題を解決していくことを願っている。

大学名： 外交学院

氏 名： 張焜琪

テーマ： 4.日中間の交流

①日中両国の交流促進における効果的な方法は互いを知る機会を持つことである。京都大学での交流の際、ある日本人学生の話として彼が北京から日本に向かう機内でうるさい中国人を目にしたが、日本から北京に向かう機内では疲れからか大人しかった中国人を目にした。この時彼は中国人の俗に言う「素養の低さ」は実のところ日本に行くことへの興奮の表れなのかもしれないと思った。また日本も経済の高度成長期においては同様の経験をしているため、こうした経験から彼は中国人への理解が生まれた。ホームステイの際、ホストファミリーは自身がかつて中国に短期留学し、ホームステイもし、その際中国の人々が彼にとっても良くしてくれたため、彼もお返しがしたいと述べていた。彼もまた中国人を知る機会があったことから、中国人への友好の気持ちが生まれた。つまり、互いに相手を知る機会を持つ、即ち「人と人との実際の交流」があつてこそ日中間の交流が促進されるのである。

②ソーシャルメディアにおいて中国と日本には隔たりが存在する。京都大学のある学生と今後も連絡を取り合うことになったが、私には Line や Instagram がなく、彼女には WeChat がなかった。その後私は Instagram を、彼女は WeChat をダウンロードし、解決手段ができたが、やはりとても不便である。

③中国人学生はこれまで以上に中国について紹介していくべきである。交流において両国の違いについて述べる際、多くの人は中国について「空気が悪い」、「水の汚染がひどい」、「宿題が多い」、「恋愛ができない」、「トイレが汚い」といった内容ばかりで有益な紹介は何一つとしてない。これは日本人の中国への印象を固定化するもので、交流の効果はいまいちだと言わざるを得ない。

今回の 8 日間の日本訪問では日本のすべてについて完全には知ることができなかったかもしれないが、個人的には、発展途上国である私たちには日本に学ぶべき点が沢山あり、優れた点を吸収してこそ私たちは発展を続けることができ、またそうしてこそ日中両国の友情はより安定し調和がとれると思った。

大学名： 外交学院

氏 名： 劉益琪

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

日本のホテルやレストランでの宿泊や食事の際のスタッフのサービスの細やかさは、私にとって非常に印象深かった。ホテルニューオータニのフロントでは人が訪れるたびに警備員であれフロントのスタッフであれいずれも会釈と挨拶をする。これは中国では想像もつかないことである。だが最も印象深かったのはホームステイにおける出来事であった。私は日本を訪れる前からホストファザーとメールで連絡を取り合っていて、ホームステイ期間中にやりたいことなどを伝えていたが、ホームステイ期間中に私がちょうど誕生日を迎えることについては一言も触れていなかった。だがホームステイ初日にホストファミリー宅での夕食を終えた際、彼らは突然冷蔵庫からシフォンケーキを取り出した。またそのケーキにはチョコレートで「おたんじょうび おめでとうえきちゃん」の文字が書かれていた。そして彼らはケーキを囲み笑顔で私に願掛けをしてろうそくの火を吹き消すよう伝えてきた。その時私は感動で涙がこぼれそうになった。実は私の誕生日がちょうどホームステイ期間と重なることを初めて知った時は多少複雑な気持ちで、異国の地で自分の 20 歳の誕生日を迎えることには一種の流浪に近いものを感じていた。それ以外にもメールでこのことを伝えていなかったのには、ホストファミリーに手間をかけさせたくないという思いもあった。しかし彼らは私の誕生日について気が付き、さらに早々にバースデーケ